

## ご厚情を賜られました皆様へ

秋冷の候、

皆様にはお変わりなくご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、突然ですが総江が9月1日に「誤嚥性肺炎」で召され、家族だけで2日に通夜を、3日に葬儀を完了致しましたことを報告させて戴きます。享年79才でした。戒名は父が台湾總督府で台湾の電化計画を担当しているときでしたので、總督府の「總」を戴いて総江と名付けられ、菩提である常光寺住職が、「總」は由緒ある字であり「江」は河や川より雄大、良い名前なので「總江（ソウコウ）」と音読みし、「尊號釋總江老尼」との戒名を戴きました。



「カテーテルや胃瘻人間にだけはしないで」との總江の強い願望から、家族は「看取り」を選択しました。しかし、8月18日には横須賀市民病院の医師から興寿苑への帰苑は不可能、移動中に死亡する危険もあり、「医学的には非常識」、「病院内の安全委員会に諮る事態」であるなどと言われました。

私たち家族は総江が自宅とも考えていた興寿苑で、残りの人生を少しでも人間らしい生活をさせたいと、「看取り」を決断しましたが、それは興寿苑が引き受けてくれたからでした。

「興寿苑が引受けた」と知らせると、自発的に手を上下し、口をパクパクするなどリハビリを始めたことから、総江がどれほど興寿苑に帰りたかったかをご理解戴けると思います。

そして、8月26日に「途中で万一のことがあっても、本人の希望を実現しようとしていたので心残りが無い」と、強く押し切り興寿苑に帰って参りました。病は「気」からの諺の通り、苑に帰ると7リットルほど供給していた酸素は3リットルに低下し、帰苑後の3日間は冗談を言ったり、笑ったりしていました。また、後藤看護部長を先頭にスタッフの皆様が、総江の好きな「苺シャーベット」や「プリン」などを3回も食べさせて下さいました。今でも満足そうな総江の顔を思い出します。

9月1日に看護部がオン・コール体制に入ったと聞き覚悟して帰宅、「お亡くなりになりました」との電話を受けて駆けつけ、微笑みを浮かべ安らかに眠っているような総江を見て家族一同、安堵し興寿苑の一人一人の優しい介護が目につかび、感謝の気持ちと総江の喜びに満ちた顔が重なり涙が止まりませんでした。



私が大湊で「ちとせ」の艦長をしていた時に、エリザベス女王様が来日し一番楽しかった思い出は、ときかれ「マルタ基地で夫のエジンバラ大佐が艦長をしていた時に、任務を終えて帰宅し家族と一緒に食事をするとき」と答えられたのを聞き、「エリザベス女王様も私と同じことを感じておられたのね」と語り、私を支え続けていて呉れたが、「ちとせ艦長奮闘記」の締め切りの9月1日の黎明に天国に召された。「ありがとう。合掌」との追悼文が編集者の好意で、掲載された『J-Ships』10月号（9月10日発売）を霊前に供

えることが出来ました。ありがとう御座いました。感謝を込めて 平間洋一